

エル・システマ・フェスティバル2018

東京ホワイトハンド コーラス

僕らは歌う、歌は踊る 劇場で創る共生社会

聞こえない子どもたちも、見えない子どもたちも、
ひとつの歌を創る——。共生する舞台を目指し、
一步を踏み出した子どもたちと劇場の取り組みを
取材した。

東京芸術劇場では一般社団法人エル・システマジャパンとともに、2017年から、共生社会をめざす芸術活動「東京ホワイトハンドコーラス」を実践している。

日曜日、5階の練習場に子どもたちが集う。手話で談笑する姿を見張った。指先や腕、視線が猛スピードでリズムカルに小気味よく動く。日常会話が、鍛え抜かれたダンスのようだ。

「ゆうやけこやけ」の練習では、声楽家・コロンスりかさんとろう者演劇俳優・井崎哲也さんが、文字や絵、動きや手話で「小鳥」「鐘」の意味を話す。いい考えの浮かんだ6歳児が一步進み出て、手の動きを編み出した。子どもたちは、歌い手の表情や呼吸の長さ、拍の速さから音楽の要素を汲み取り、「手歌」と呼ばれる表現を創っていく。

2017年の「エル・システマ・フェスティバル」は思わぬ感動に包まれた。11人の聴覚障害の子どもたちが合唱と共演。天高く差し伸べた白い手袋が、南国の蝶のように舞う。美しく機能する手の動き。情感を湛えたまなざし。障害と生きる暮らしが、伝える力を育んだ。南米ベネズエラの、音楽を通じた社会教育システム「エル・システマ」。革新的なオーケストラ教育で世界の注目を集めるが、1995年からは多様な障害を包摂する「ホワイトハンドコーラス」も加わる。白い手袋の「手歌」と「声」による舞台だ。

そこで2018年からは「東京ホワイトハンドコーラス」にも、視覚障害の子どもたちの「声」が加わった。音楽療法士で声楽家の土野研治さんは、上体が傾きがちなお子にも、身体の軸に気づかせ、意識を外に開いていく。「子どもにも集中力があり、音にすぐなじむ」と手応えを語った。

歌詞には色彩も歌われる。東京都立文京盲学校の作田佳奈美さんは「全盲の子も小さいうちから色の認識を積み重ねています。盲学校では全盲の子と弱視の子が『これ何色か見て』『赤だよ』と支えあう姿も見られるなど、とても色に興味があります」と話す。見えなくても色が存在する。元来音に敏感である子どもたちは、色彩にもその価値を認め、探求する心を持っている。



共生。見えないけど、聞こえないけど、君はいるよ

だが、見えない子どもと聞こえない子どもは、どうやって助け合い、舞台を創るのだろう。

視覚障害の小学生は「声が届かないなら、僕たちが手話を覚えようか」と考えた。聴覚障害の中学1年生は「見えないのは、できないのとは違う。手歌と声、それぞれができることをすれば、客席から見た舞台はひとつになる。だから心配していません」と自信を見せる。自身もろう者である指導者の井崎さんは、聴覚障害者と視覚障害者がすもう大会でがっぷり四つに組んだ事例をユーモラスに語った。「今回、違う障害を持つ人に出会い、怖がる子どももいました。けれども同じ空間で過ごし、勇気を得たようです。土俵や舞台などの文化空間で、違う境遇の人と過ごせば、お互いに工夫が生まれる。そこに期待しています」

社会の障壁、ひとつひとつの工夫を丁寧に重ねて

障害者が抱える社会的バリアを、当事者のものではなく、社会全体の課題として取り除く考え方は、今や世界的な動きといえよう*1。東京芸術劇場事業企画課長・鈴木順子は、「東京ホワイトハンドコーラス」の創造発信型の活動*2について「どんな舞台になるのかわかりませんでした。でもやるべきだと確信しました。子どもたちを迎えて初めてわかる障壁も多く、目が覚めるようでした。当事者や専門家から話を聞き、工夫を重ねています」と話す。

手歌を指導するコロンスりかさんは日本とベネズエラをつなぎ、障害と音楽に長く携わってきた。お互いを知り、その場その場で適切な方法を考え出すことが大切だと語る。「誰もが安心して活動できるように、取り残される人がいないように、音楽上も細やかな工夫を積み重ねています。子どもたちと創り上げた舞台に、共生社会のあり方を示すヒントがあるのではないのでしょうか」

12月1日、フェスティバルの主役は子どもたちだ。第1部では、エル・システマの国内3拠点、相馬・大槌・駒ヶ根の子どもオーケストラが東京に集う。第2部の「東京ホワイトハンドコーラス」は、ベネズエラの障害者アンサンブル「ララ・ソモス」と共演。子どもと劇場が一步を踏み出し、共生社会を舞台に創る。新しい感動が生まれる瞬間に、客席から参加したい。

取材・文：小杉圭子

*1:2006年 国連「障害者権利条約」採択、2016年「障害者差別解消法」施行

*2:2018年施行の「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」には、障害者の文化芸術の鑑賞機会に加えて創造機会の拡大も謳われた。



エルシステマ・フェスティバル2018 ガラコンサート 詳細はP13へ
12月1日(土) 15:00開演 コンサートホール

出演：エンルイス・モンテス・オリバー(指揮)

相馬子どもオーケストラ 大槌子どもオーケストラ

駒ヶ根子どもオーケストラ(弦楽オーケストラ)

東京ホワイトハンドコーラス(指導・指揮：コロンスりか、井崎哲也、土野研治)

粟津礼子(ピアノ) ララ・ソモス(ヴォーカル・アンサンブル)

11月30日(金) 関連レクチャー開催予定

東京芸術劇場 海外オーケストラシリーズ

パリ管弦楽団

指揮:ダニエル・ハーディング

パリ管弦楽団で味わう オーケストラの醍醐味

2016年に素晴らしい演奏を披露してくれたパリ管弦楽団がこの秋、再び東京芸術劇場にやって来る。指揮はもちろん、2016年からこのオーケストラの音楽監督を務めるダニエル・ハーディングだ。

パリ管弦楽団と言えば、フランスを代表するオーケストラというだけでなく、ヨーロッパの一流オーケストラのひとつ。パリに新しく完成したコンサートホール「フィルハーモニー・ド・パリ」を本拠地に、ハーディングと共に新しい時代を築いている。オーケストラの各パートに見事なテクニックを持つ演奏家を配し、時に繊細で、時にダイナミックな音楽を聴かせてくれる。オーケストラというひとつの大きな楽器が、様々な音色の変化を伴いながら、音楽を奏でて行く。その華やかさと力強さを同時に体験できるだろう。

今回の来日公演では、19世紀末から20世紀にかけてウィーンで活躍した作曲家の作品が取り上げられる。ひとつはベルクのヴァイオリン協奏曲、もう



ダニエル・ハーディング



イザベル・ファウスト

ひとつはマーラーの交響曲第1番だ。ベルクのヴァイオリン協奏曲では、ヨーロッパを代表するヴァイオリニストと言えるイザベル・ファウストがソロを演奏。ハーディングとの相性も良いだけに、演奏に大きな期待が高まる。マーラーの交響曲第1番は「巨人」というサブタイトルでも知られている。若き日のマーラーの音楽的な野心が詰まった作品で、みずみずしさと共に大きなスケール感を持った交響曲だ。ハーディングの指揮に注目したい。

文:片桐卓也(音楽ライター)

12月16日(日) 15:00開演 コンサートホール 詳細はP14へ

指揮:ダニエル・ハーディング ヴァイオリン:イザベル・ファウスト

管弦楽:パリ管弦楽団

曲目:ベルク/ヴァイオリン協奏曲「ある天使の思い出に」

マーラー/交響曲第1番 二長調「巨人」

東京芸術劇場パイプオルガンコンサートVol.23

~クリスマスに贈る 真夜中のミサ~

2面のオルガンがいざなう 静謐で素朴な聖なる夜

今年のクリスマス・オルガンコンサートは、前半でドイツの待降節*のコラール「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」によるバッハの作品、後半はフランス古典期の作曲家シャルバンティエ『真夜中のミサ』を中心としたプログラムです。

『真夜中のミサ』はクリスマス前夜に行われるミサのための曲で、ミサの言葉をフランスのクリスマス民謡(ノエル)の旋律に乗せた、親しみやすい作品です。引用されているノエルは、全体で11曲、今回演奏されるキリエとグロリアの部分だけで5曲です。普段のミサの聖歌に基づく堅い音楽とはひと味違い、一般市民が口ずさむ旋律による作品なので、クリスマスを迎える市中の雰囲気伝わってきます。

オリジナルの楽譜は非常にシンプルで、合唱とアンサンブルのパートがそれぞれ4声部ずつと通奏低音、部分的に楽器の指定があるのはフルート、ヴァイオリンのみなので、演奏する環境に応じて、合唱の人数を増やしたり、それぞれのパートの音域に合う楽器を割り当てたり追加することが可能です。また、随所にノエルによるオルガンの独奏(即興あるいは既存の曲で)



挟むよう指示があり、構成の自由度が高い作品です。

ルネサンスからバロックにかけての4声部に分けて書かれたアンサンブル作品は、主要な声部のみを独奏あるいは独唱し、その他の声部は別の楽器あるいは鍵盤楽器で補うということもよく行われていました。2005年の芸劇クリスマスコンサートでは、ソプラノ独唱、小型の弦楽器であるトレブル・ガンバとオルガン(フルートはオルガンのフルート・ストップで)という最もシンプルな編成で演奏し、たいへん好評をいただきました。今年はどうのような形の演奏になるのか、どうかお楽しみにご来会下さい。

文:小林英之(東京芸術劇場オルガニスト)

*アドヴェント、クリスマスの準備期間。クリスマスの4つ前の日曜が第一アドヴェント。

12月20日(木) 19:00開演 コンサートホール 詳細はP14へ

オルガン:小林英之 新山恵理 ソプラノ:広瀬奈緒 ヴィオラ・ダ・ガンバ:福沢宏

曲目:J.S.バッハ/コラール「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」BWV659,660,661

シャルバンティエ/『真夜中のミサ』より「キリエ」、「グロリア」ほか

東京芸術劇場シアターオペラvol.12
全国共同制作プロジェクト

モーツァルト 歌劇『ドン・ジョヴァンニ』全幕

(新演出、英語字幕付、日本語上演)

インタビュー 総監督・指揮 井上道義

日本のオペラの新たな時代は、 日本語が開く

幼子が歌うとき、その身体は期せずして揺れ踊る。
歌と踊りは本来渾然一体。オペラが日本語ならば、
日本人の身体は自然と音楽に呼応するのではないか。

わざわざ日本語でオペラをやる

オペラは、観ている人が音楽に身を任せてその世界に入っていければ面白いものになるけれど、演技が下手だとか、衣裳に違和感を感じ始めたら直ぐに陳腐なものになってしまう。「舞台という不自然さ」をどうやって飛び越えてもらえるか。そこが指揮者、演出家、歌手に課せられている仕事のすべてだ。そのためにはどんな手段を採ってもいいと僕は思っているけれど、音楽の中に秘められてないメッセージを無理やり「新しい見方」とか言って入れ込むことは、悪趣味な仕業だと思っている。

勿論、「音楽さえ良ければいい」という気はないが、最終的に、人が「感動する」とは、「音楽が何かを時空を超えて運んできた時」であって、演出が素晴らしい、ということによる感動のたぐいは、オペラの中心ではないのではないかと、とも思っている。それは野田秀樹君と《フィガロの結婚》をやったときにも、彼が「本当にいい歌をやっているときは演出したくなる、立って歌ってくれ。俺はここ何もしないから」というようなことを彼が練習中、3か所ぐらいで言ったこと、よくそこに気がついてくれたなと思った記憶もある。

評論家が目新しい演出ばかりを賞賛するのもおかしいと思う。クラシック音楽なんて、新しいことやろうと思ったら死んだほうがマシなんだ、新しく見えることをするだけ、新しいふりをするだけ。そこを間違っちゃいけない。

今は字幕も楽に見られる技術があるのだから、日本語でオペラをやるのは本流から外れるイメージがあるけれど、逆に『こういうことをやるのだったら日本語じゃなきゃ無理だね』ということまで行きたい。欧米の複数の劇場で、今でも母国語に訳して上演している現実と多少意味が違う。今回は、歌手に日本語のできるロシア人とウクライナ人の二人がいる。そういう時代なのだとすることも表現してみたい。しょうがないから日本語でやるのではなく、『わざとそういうことをやるのどういう意味があるのか?』ということ

をお客さんも一緒にいろいろ感じてもらえたら、というこれはオタッキーな試みです。



Art Direction / Illustration: 森本千絵 (goen*)
Design: 高橋純 (goen*)

日本語でやる 難しさと意味

オペラにはハーモニーがついていて、和音や調性は、それぞれの情緒を持っている。ところが日本語とイタリア語は語順が逆なことが多いから、そのまま日本語をはめ込むとハーモニーとのバランスが不自然になる。だからといってハーモニーを変えてしまったら、それは音楽の方向性を変えてしまうことになる。



井上道義

だから日本語の方を色々動かして、言わんとする内容を通じるようにするという大変な作業が必要なわけ。でもそんなことをお客さんは知らなくていい。その場その場で、響きと言葉の意味が一瞬のうちに理解出来る、という気持ち良さを楽しんでもらうことが、『わざわざ日本語でやる意味』だと思う。

だからある意味イタリア語がわかるお客さんをターゲットとしてはいないのかもしれない。かといって、古い浅草オペラのようにする気は毛頭ない。オペラをやりたいけど色々無理だったあの時代、まずはオペレッタをやった、それも思いつき翻訳して言葉使いなども当時の日本人のセンスに合うものに作り変えちゃったでしょう? そういう落とし込みを今回やる気はないです。生活の底が高くなった今の時代にやる必要はないから。

これは日本のオペラへのひとつの提案

それと!今回は、ダンサーたちと一緒に歌手も動いてもらう、踊ることさえも。今回オーディションで選んだ人たちは逆立ちしても声が出るし寝転がっても歌える。日本人のオペラは、こういった方向に行くべきなんじゃないかという提案です。往年のイタリアオペラと同じ方法を追えば、日本語が喋れなくなるぐらいイタリア語が喋れなきゃいけないし、歩き方から、ひょっとしたら顔まで変わらないとおかしいかも。体格的にも細めな日本の歌手が真似しても、無理ばかりが目立つ。

今回は日本語でやることに加えて、体の言葉、ボディーラングウィッジと、世界語を目指す音楽語の、云わばバイリンガルで歌を捉えるという方向をも目指しています。これは日本人に限らずオペラが進むべき突破口のひとつじゃないかと思う。もっと良い方法もあるのかも知れないけれど、僕自身もいくつか演出してきたこの方向で長年やってきて、演じる人たちも観る人たちも面白がってくれている。

ダンスや踊りをオペラに深く突っ込む方法は、「コラボ」とか呼ぶ簡単なことじゃない。オペラにダンスがちゃんと入って来ることは、僕は『革命』だと思っている。その上僕らはまだまだオペラの開拓時代にいるのだとも思いたい。間違った意味での〈古典〉でなく。

演出の森山開次さんは、とんでもなくいい才能です。この方法は僕がくたばったあとでもずっとやれると思うので、第1回ぐらいは一緒にちゃんとやりたい。彼には「この方向でどんどんやってよ」とこれからを託したいと思っています。

取材・構成: 河野典子 (音楽評論家)

2019年1月26日(土)・27日(日) 14:00開演 コンサートホール 富山、熊本公演あり

詳細はHPへ

総監督・指揮: 井上道義 演出・振付: 森山開次 管弦楽: 読売日本交響楽団 合唱: 東響コーラス

ドン・ジョヴァンニ: ヴィタリ・ユシュマノフ レポレロ: 三戸大久 ドンナ・アンナ: 高橋絵理 騎士長: デニス・ビシュニャ

ドンナ・エルヴィーラ: 鷲尾麻衣 ドン・オッターヴィオ: 金山京介 ツェルリーナ: 小林沙羅 (1月26日出演)、藤井玲南 (1月27日出演)

マゼット: 近藤圭

ダンサー: 浅沼圭 碓井菜央 梶田留以 庄野早冴子 中村里彩 引間文佳 水谷彩乃 南帆乃佳 山本晴美 脇坂優海香